国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

856-10

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

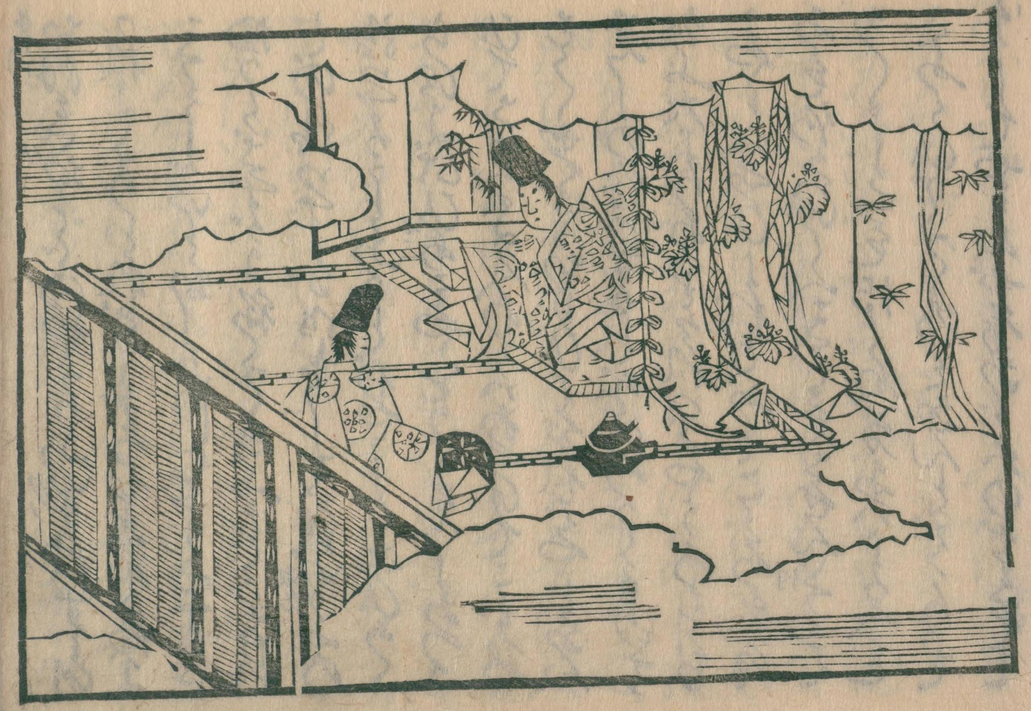
ガラス使用

ひとのぞりこそこなかりしろもあせ
ぎ。たゞかくもそのすぢとなく。掛たるか
き更衣ばかりにて掛し給へれば。ゆまで
らひのかどもあげそげにて。大后の関
侍のうちをまいりをこそまろうなて。かく
ゆゑにあらぶ人なくもてなしきこえ給
なとせし程に。けをさまさく。みなどもも
ゆゑの中にいとおしきもれにはいきこえ
させ給ふなりしおりなさせ給ましかばひ
なくくちおしくて。世中をうしみくるか
やうにてうせ給ふし。そのはちれ女三宮
をおまこの中にまさぐまそかなしきも
のにはひとづきさこえ給。そのかどに
ゆとし十二四ばかりにおはす。いまはとそむ
きそぞやまごりしなん後の世にうちを
まりてこまをあのむかけにて掛し給

たんとすんにこゝこのゆこと給うしろ
めたくおりしなげく。西山なるゆてしに
くりたてくうつろさせ給りんほどのゆい
そきなきせなかにそへてまここのまゝ
のゆもぎのことをおぼしいそうせ給。院の
うちにやむことなくおぼさ。ゆあうら掛
でうどだをばさうにもいたゞ。たうなれば
わそびものまて。さこしゆへわるかぎり
をば。あぐこのゆうこにとまこしこそま
つらせなて。そのつぎ〳〵をなんことみえた
ちにはゆそうぶむどもわりなる。まちぎ
はうらゆゆやこにそへて。よをそむかを
こまふへきゆこころづかひになんとまうせ
なてまこうをなつり。たゞ女ゆりそひきこ
えきをなて。まいりなつり。さぐれこるゆゑ
がえましをわらぐりしうど。まれかくて

おぼえかたろぶ屋うんと世人もをもむけ
うさがひけるを此ゐよ志のひをぐし
なて表文などゝあるも此御せ中ゝなふ
いまたてまゝなく志てしうるゝなゆ
となり むつびうたしなつるゝがぎりな
くこゝ語ゝは書りひなつら 如よのを
ろうなるにそへて 元の屋ゝに 為ら
まじるを 朱卓下之 がてくなる 御さ屋ゝやとて 中ゝ
よそのことに 中ゝしたなちこ 御さ屋ゝ
て 侍る 冷 閑の所ことだ 相つかゝ声 が 所遣云ぐ 所ゝ
所ゝうまつり 亜てしかたがくを 無乃
これわきてけきさきとしてぎしかさ
志所ありてぶせをもおこし 語 御のご
といとうましくなん このわきれ 所
奉の後 いかしへのことゝりそへてゆう
しく 見つゝなくなん おほえなふ

めんよ 中ゝ四べきことゞ 元 侍り うなゞに
御 こびからとふらひものしてまふきよし
僧尸 なんどうち志ほられ 所ゝ 乃 給ず
中 夕刻 納云の 忌すぞ 侍よそんりこれども
くゝ 元 おりひてまへ ほどきがてく 侍り と
しまうり入侍て おほやけなる 所ゝう
まつり 侍わいで 世中 所ゝ 御みてまへ
御うりわるとく 御ゞ 大小のことにつ
めてゝ 元 うちくれさるべき 物がてりな
どの 所ゝいで なる いかしへ 乃 うれ 所ゝ
ことありて なんなど 御 うちうすあ 尸 さるく
おりハ 侍らせなん かく おほやけ 所ゝう
しろきを 所ゝうまつりさして 志づ
なかなかひとなへんと 元 とへにこりゐ
しろちハなにことをも 志しぬやうま
て 相つかゝ 於院の所遣云 れことも 元 所ゝうまつ



らざと此後におもしましく世まへよ
もひのあどを男のうつ物もをとも
むとかしこきさうこの人こおほくて それ
ぬぎしをとどけて此らんぜうることも
なかりき今かくまつりことはさるを
て志げかにおりし面に比なひ此れう
ちをも面ぐてくなく さいりうけ面
ゆゑ面なりしきをさすがにあにとおく
所をれ男のよそほひまそだのづつ
月日をもぐすことゝかんおりくなげ
こゝ中語かど發し語二十ばかりまぎ
まげかなるほどなれど いとよくさこの
ひすづしてかくちをさうりにまほひて
いこゞくさようなる此此めにとぐめて おす
まもせ語つゝこれりてわづら里語此之れ
此後見にこれをやかど人志れざと送よりけり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

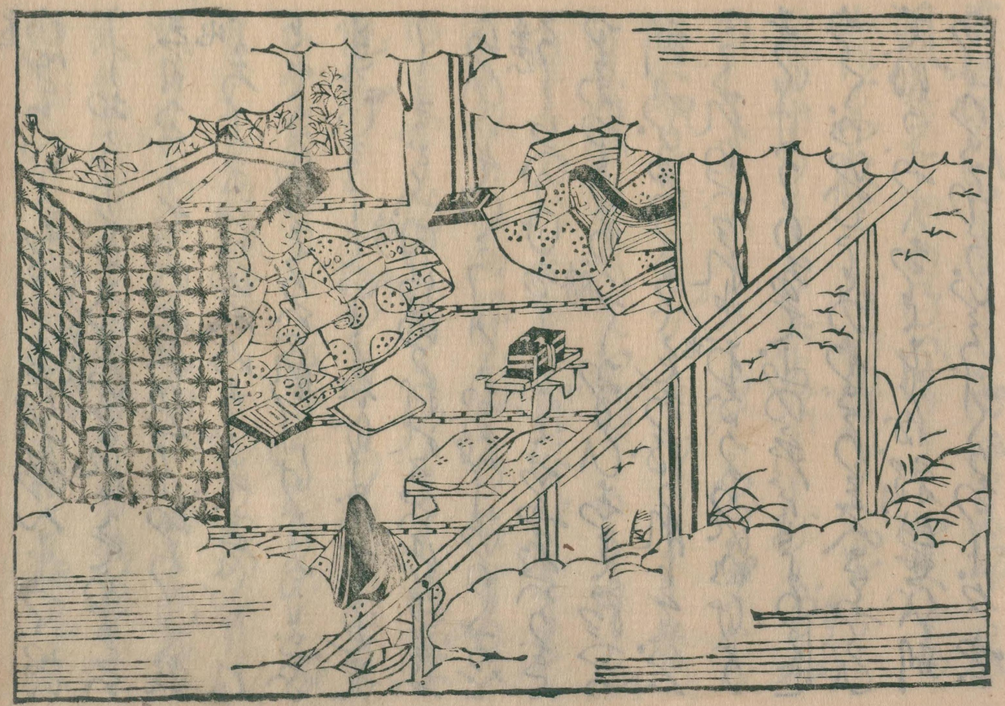
国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

あんなさだりをうしこれとれれもひ
さぐめんいとわりをくちなしうんべ
きわざれなん。右衛門の督おくれまぶ
なるなよし。関係の督のものをくれ
し。その人ばかりなんくらゐなど今す
こし掴めしきかどれなりなれば。など
なはとをおよりぬ。面をきけ。まぐさし
いとわく。むげまうろびくろほどなり。
くろれなぐしふくてやもめずこふ
てなしつゝいてくおづまりおわがまる
なしきひとまいぬけてざえなども
こともなく。つゐまいよれかくれとな
るべき人なれば。ゆくをおもふ。あれもし
なれどなれ又このくめなとおひまそん
まいなぐりぞわるやとよろげに笑し
まづくひくりかやうなるおぼしよくぬ

わ[illegible]をくちをばかけるもゆしなや
ましなふ人もなし。おやおくうちく
まの給ひすなかれさめきことゝもの。
をのづくことひろごりて。なれば行く寸
人をおほうりなり。おほきおとゞをこ
の清の[和]給の今まぐくひとりのこわり
てみこくちなくだいえしとおつるを
なほれさぐめどもいでまさなほなり
まさやうなるをもむけくそまうりて
めしよをくれくてん時。いかだうりま
ぐらめなをめんぼくわりてうまし
かんと笑しの給て関係のかん乃
きこなれば。れわ[illegible]の小のうさしてて
つゝ入口給なりなりよろづかなりひ
きこ云乃兼を作くしてそうをきを
作くしまを給いくを給。[illegible]乃[illegible]

男はうれしくあはれにおもふらんかしこにあんわらはをもたのめてとしのくれわびしくうちながめくらしてゐたるをりふしにつけてもいとどもののみかなしくてひとりごちあかしくらすほどにかのひとのもとよりとしのうちにかくなんいひたりしをいとものうくはあれどもいかがはせんとてかくなんいひたりしかへりごとをいとくるしくおもひわづらひてかくなんいひたりしかへりごとをいとくるしくおもひわづらひてかくなんいひたりしかへりごとをいとくるしくおもひわづらひ



の具ゆへあるさ海にあらくあくさへて
さすがよりとのみだへをうしあるべきれ
とみをて、その日は夕はくさなりさ
給ふ文の様のすけ院の殿上にもさふ
御代は使まて姫文の作方にまゐら
まへくの給ひをつまどかゝ御ことそ申
まゐりける

特 さしなりし者を今まつてあまへ
あのをべしそ給さびまける院はんド
給けてわれれは見て出るることぞをあ
なり、わえ掛けしうはわくじとゆゑり
あつる程ぐにあをべて志れりんざしあれど
はゑりをむしのあはまさをいさこ無て
さしつぎにゆる掛あがくうづれ
つぎのをべしれりこさあるまでとぞ祝
まこへくまへか

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

こゝろあらぬぎ海しくりくてハなどゝ
めらぬまじくハ心やすくてを偽なん
をかの（徳義主）もしら女法乃ゆかしてぎ海まてを
（第七女三ハ心こゝ）うとゝらすおぼしがずまへらんやとひ
がし語を（徳有）おまりうらすさけたまふ
ゆゆしを いつまきまだとうしろめく
くこそあれまことハさぐにおぼしゆ
なしてまきる人をゆえくなぐこゝ
かにもてなしなし語ぐいよく多
まなんひがことゆくなどせん人のこと
をこゝいれなつかまへくよの人乃ちち
といふものなんこゝがいひ出ぬことも見なく
をのぼうら人ぞなからひなどうち
ゆゝゆがこゝ心ぞなることいでくる物
なめるを心ひとつまゝづめておこさ海
まゝさがふなんよれまぐこさにさらぐ

て おいなき物うらみし語なといと
よくなしへゆく語（ばんん）のうちなる かく
ゆこよりいでまたゝ海やうなることに
て乃がまゝ語ることなれをよくげなる
ゆくなさじ我心にもぐりなへいさ
むことにもこゝひなへさ それがこち
のこゝ語ゝろまをこまぬけさうまも
あらず せうるへなる方なれ物ゝおこ
がなしく心ひむすぼゝるさ海世の人
まもゆまきこゝえじ あらはこゝのおほ
（第八まゝ母）ぬ方つゝにうけハしけなることゝも
乃語出つゝおぢさなれ（ひけうな）大物の語こと
までさへおゆしく恨そゝこゝ語なるを
うやうまこゝていつにいちぎるくこひ
あなゝ語ゆんなどおいらるなる人乃ゆ
こゝ語といへどいつてかハかもりぬ海

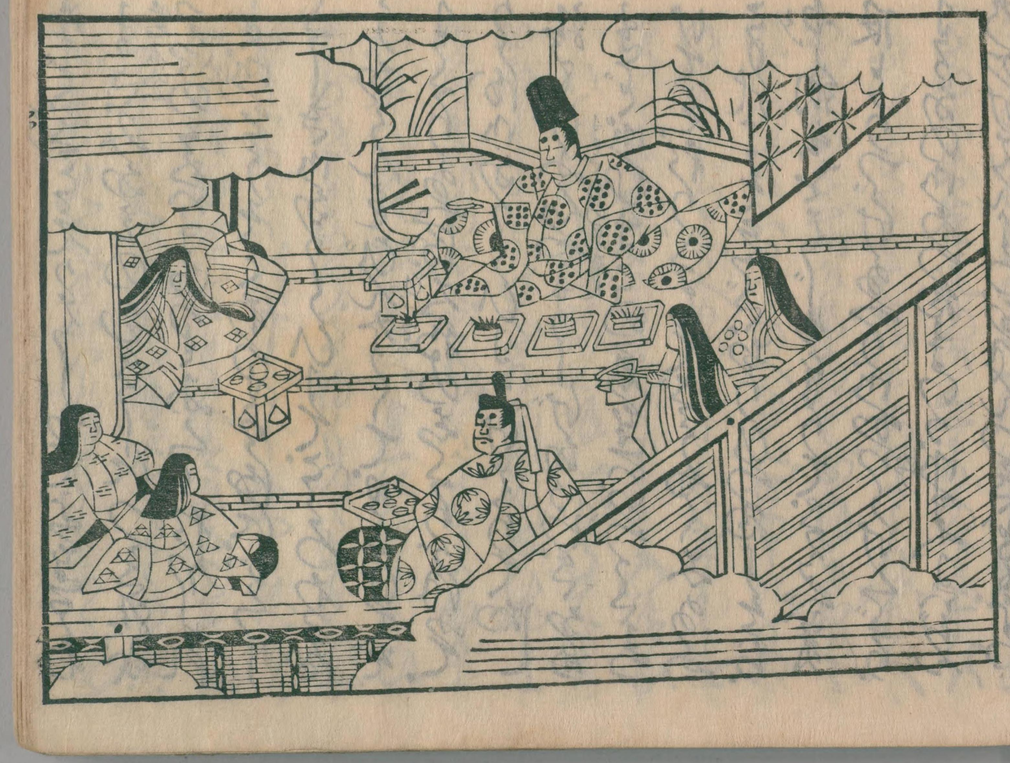
はなかんいまはさりともとのこゝわが
こゝをおひわがりうらなくてなりしける
世のひとわくへなりんことは志さまは
おひ給ひけるへどことあいらうに乃こ
もてなしなり年を加へりぬ朱雀院
まゐ姫女六条院よりつろひ給ひん
ほいそれをしなふ中のしなつる人ゝいと
くらおしくおぼしなげくうちなれ
んどへわりてやまく給ける程にかゝ
ほさごめをきこしめしておぼしと御
ゆにかり さるへことしぞよそらまゐ
給かれだ御賀のことおほやけなるこ
こしめしすぐさす世のゆれいとなこ
まてかゝくよりひくとことのまづ
らひおほくいかめしさことは昔より
このこ給ひぬ御ゆまてこれかへさひ申

給ひ正月廿三日なれ日なるに左大将殿
乃北方まうかまいり給ひ孫くなし
なるもしし給ひそいといてて悲び
ておぼしまうけたりなれだ北のかに
て元のさゝめかへしきこゝ給ひ御幸
びこまど御ぞかりの御いとなほひか
まばわたりなふ儀式などいとひ
こさ と也こゝかこの程とに西のなか
ちいでにおましよそふ屏風がへしろ
よりまもしめ新たらひ志つらゐまゐ
たりうるはしくいしなどへこそだと御ら
しき四十まい御志と○けうそくなと
もべくその御ぐとも いときよりにせき
を給へり らでんのこづしふこゝろひ
よ御衣だこゝろもへく夜冬れ御き
うそくかうこくすりれもこ御すり

ゆすりつゝさゝげもてくるこゝろばへやうれ
しからむ　ゐなかびたるものゝ　ことにふれ
ていとおしうおぼえたまふ　ちゝみこもまた
ことにあはれもかけたまはず　ものをのみ
つゝしみおもへるさまのいとしるきを　ま
ほならずかたはらいたきまでおぼしやりつゝ
ふしまろびたまふ　ものゝけなどいふもの
はさらにいはず　ことにしたがひてあやしき
ことをのみしたまふ　ものゝけのうつりたる
ときは　ことばにくだりてのゝしりさわぐ
をさへぢかくゐたまひてなだめすかしたまふ
ことかぎりなし　ものゝけのよりまさりて
ののしるときは　ことばもいとあらくきゝ
にくきことのみぞあるをいとつゝましう
ひがごとへやとおぼゆるまでのゝしりあ
へるをきゝたまふ　ものゝけのあやけあ
らはれまゐりこ

とめづらしくそゝみきよまはりのおいとゞ
ものゝおいとそびやうゑなどいふ　それど
ものゝけなどいふものゝなくて　ものゝ
やまひのみしてくるしがりなやむ　なほ
ものゝけのしわざなりけりとおぼしいたる
てのゝしりさわぐ　ものゝけのもりいでゝ
ぎれぐしきことをおほかたのおぼえにて
ざえんぜさせおこなはせたまふ　ものゝ
けりことにおにのやうになりてをぢ
ごどもまでおそろしとおぼしたるをひ
きこしつゝのゝしりあへるこゑごゑ
いとまびしう　昔のくまのわらべ
しもそこにまゐりてわらはやみ
をもとなやみまどふ　おにやらひ
しにもおこたりたまへるしるしなく
ものゝけのよりまさりたるやうにて
ありつるをもたのみきこえたまへるに
ぎれぐしきことをおほかたのおぼえにて
ざえんぜさせおこなはせたまふ　ものゝ
けりことにおにのやうになりてをぢ
ごどもまでおそろしとおぼしたるをひ
きこしつゝのゝしりあへるこゑごゑ
いとまびしう　昔のくまのわらべ
しもそこにまゐりてわらはやみ
をもとなやみまどふ　おにやらひ
しにもおこたりたまへるしるしなく
ものゝけのよりまさりたるやうにて
ありつるをもたのみきこえたまへるに

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用



しくありひへぞそくまゝこをず
うし。人よりことにかぞへとりなひなる
なるのなれば。にしてなほうまゝこれ
しぞしい老をもまれてを偽べさ
をとゝさえ給ふんのさこもいとよく
称びまさり。もれくしさけさへそ
ひて。こゝ御かひあるましなへり
まろ[illegible]なさに乃へのふ和を引つ
まてもとの黒称をいろるなふ事。
とせあくおとなびゆまく給ぢんのを
しさよ引して。御まられさ海だろり
氣まり。御かなくけとり給て
小和原すせのよもひふ知られ
てや乃べのわるなをとしとつむへな

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

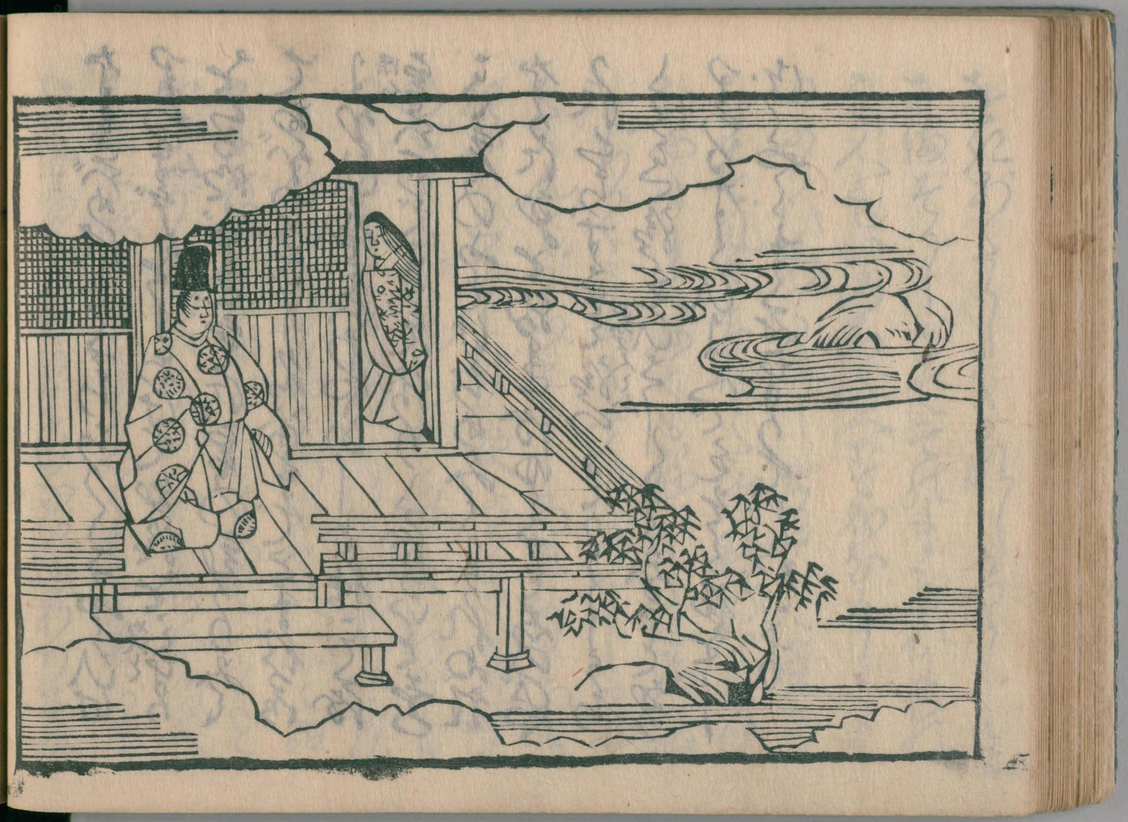
なでふことこそなけれとてよりそひ
まことみやこのえさしにつきて
ゆくへのうせたまひぬるをおくれ
どもをそこはかとなくあはれ
きわりなくひとそこうわなり
うちうんをびんなくてはてけて
もとりのへにたゝのもとりのみそ
うちなきかうしひこうけだうてゐし
ゐもげにんやまーげのうわぎ
をまでにはひまごのえもきづくまつ
けてもわりこうてざうゆくものふ
こゝろそそぐおりひつゆうそだ
ゆ納をもてめなりてざうべき
限とうつげのこうにおわうけてう
こうるのにわつ物まうゐまへいだん
乃ゐけだんこうおほんつをどるな
うくいまゐをこうにはどにせて
うゑと朱雀院のみこすのことなく
ものこゝろぼそうおぼしたるに
ゐどうおこうきこえ給ふ
ゐどうおこうきこえ給ふ
ゐどうおこうきこえ給ふ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

なまさく。さうぐしく。おぼしたるつ
りに。このこやれかくまたりまゐ。
めやまとけまゐ。おぼしたるこゝ。
せぬまやわらんまゐまもむつびこゝ
てわらまゐしきゑわいかくへでそわる
さ海に。人こゝ海どりかさんとまゐんひ
こしき。狂れたりご海などこ人こゝそ
こゝなしずこゝごろこともそのづつ
いでこ海まゐなれ。かたゝけかくこぐ
なしきゆゑとかめれだ。いつでこそれ
なしとなんこゝなどのこまへだ。
中勢中勢の云などやうの人ごめくく
なせつ。わまりな海ゆゑひやるとなく
どいふべし。昔ひてゝよしぬさ海ふつ
がひなし。絶し人ごもなれどこし
ばへ此ゆ方まさふらひてこれこゝせ

ばまえこ海なありごとゆかこゝくよりを。
いつにおぼしたるん。かとよりこゝひとなれ
こ海人ごへ。ゆくこゝやまとゑをなどをも
むけつゝごゝふらひこゝこゝ絶もわるを。
うくなしもう海人こそゆくこゝ
かれ世中をいとつゆゑものをお
ごそろさのこゝこゝひなやまんなどお
おまとおまりへしこゝよひゐを例
なしずひとやこゝかんと。このれまゝ
おぼして入絶ぬまばゆふまゐ海ゑ
ぬまごとゆふかこゝさひしこゝれ
よかへまけるもなれこゝなしぬこち
もまごとかれまゐ海のゆ別のわりを
見しいづまばゆ今ゆとかけたれ絶
てを。こゝおなじ世のうちふこゝなら
ましかゝと。わゞ身までのことゝうち

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

らひ侍るとわるも御めれとさ申すさ
せたべりねとだうりこと家にはさこえ
うり。ことあることなの御女やとおぼす。
院よはさこしめさんともいとあし。此
ごろだうり御くろもんと笑せどえ
さもわらぬをさはさひしことぞかし
わかくるしとこづうらさひ御ぐあ
なふ女君をさひやるもなれ御心かれと
ぐるしがり給。けさは例乃やうにか
かとのこりあはさせ給て。文の御方
御ふみなれ給ことにもづうしげをか
さ御さ海なきどの筆かど知れ給く
ろひてしろ貴かうに
ゆこちをべで御る程なすけまき
ごを心こごろくあるのわれ君。梅につけ
なり。人めしてかしのまゝ殿ようなき

せよとの給やがてこいでして。ぬしち
うくおりしますさろさ御そどもをさ
なて。花をまさぐりなつ女まろゆれ
乃ほのうに御まるうへは。ぶちりそふ
雲をなりめなり。笑のまゝやに。ちり
さ紅梅乃すゑにうちなれるを。袖
こそまゝへと花をひきかくして。寺
をしおげてながめなり御さ海。夏は
をかうる人まゐあやまそをりさくる
とみえ給ひぎと。わううな海めりし夏
御さ海なり。御なりすこし程ふるみち
とまぎば。いりなて女君に花をさせた
てまつり給。花といはぐ。かくこそ御ハ
まりしかきか梅まうしてかしぬちり
ぐうりをこころまく方なくやわら海
などの給。こまるもわまるにうろろぬ

ほどめとまるにやわらん。花のさかり
よりはこそ。をとめやあどの給に。
わゆき給のうすやうよ。おぼしわかれをし
つゝまゝこゝにをと。むひつゝぶまてく。
いとまろなれば。しまらしこゝをなりこそわ
らんやべでつとはなけきどわれく
しれなりなんは人のあどかてこけな
しとおぼすよ。給れかくしあるんをん
をれあるべきまゝかくてそれひろけあ
あれば。しりめにこゝをこそそひ
なりなくてうちものあるにきえ
めべき風にこゝろふまきのわれ
かふいとわくおさなげなり。さべかり
の程にあるべき人をいとかくはあはせぬ
をれをとゝ先とまゝまゝこゝぬやに
まゝてしてやこゝのねことんらへ

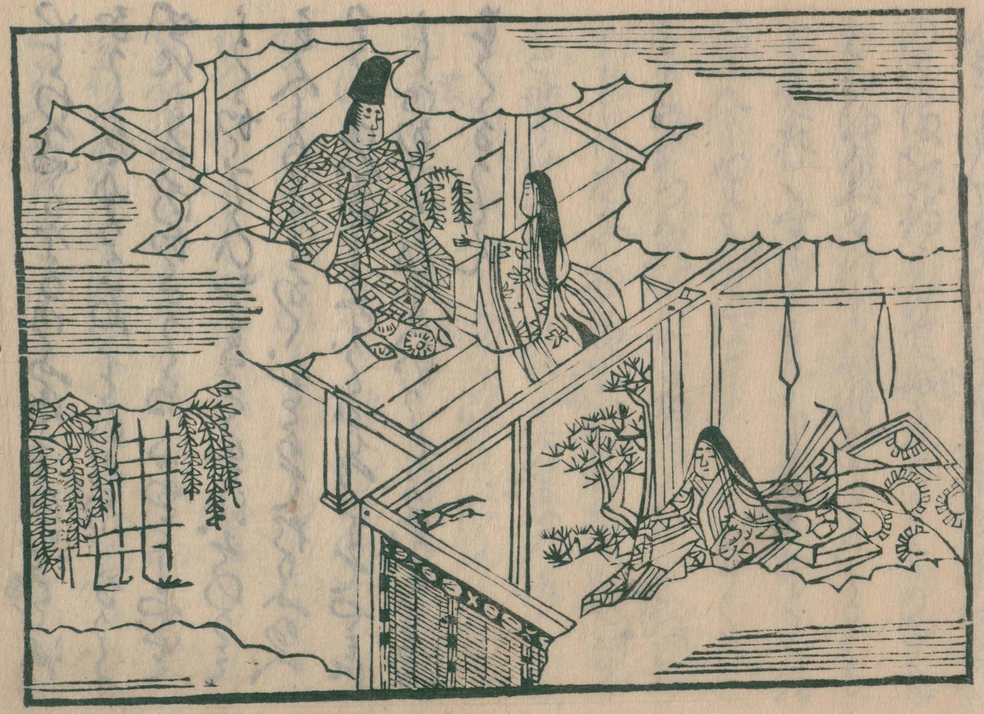
ならばさこそわまあどは思ひてきこえ
あべかれどいとれしくてこゝ思やすを
しひあしあへとのこゝこゝ給ふ
は美のかたよひあまりあ心こと
ようちけさうじあ心かわりさあ
いまんなあ女房あどはまして
うひわかとれもひこゝあんし
かめれとあどやうのおひしあ
人ごそいてやこのかたれひとあ
めでこれめさまりしこゝはあん
うしとうちまゝてかあるあり。
いとらうあげはあさあれさあ
かしつひあどのこゝしくよぐ
けくうりしきに。こゝろはあ心
なくあるあさかほどまそいと
がちふこをなくわえうあり。こゝ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

ことに涙もろうまかん。昔にかはりて、
おとなくしくはゆるく給ひのうらこ
まをうくてやとひきこうどうしなふ
年月をゆにへだてくわかる死
さうをなげくてをつるなきぐろ。女
涙のこせ死こあがる死あれ也
りわふ君はもゆくこえりきこ。などか
けはなれゆるくなへど。いりまへをおぼ
しいづるもふまにおよりはおぼらはさる
いこじきこともわるまし世此さまだ死
とれもひ出給にがふ今てこびの射
面はわるまもまべうりかりとおぼしよ
なるをもとよりはげしゆるなる所はお
ひをざりし人君こしぢはさ海ぐよ
世ゆをさひあり。きしうこをくやし
くおぼやけわこくしのことにあれつる

ねもなくおぼしわつめて。いといこ
るし給はこれど。昔おぼくこ海の射面
よ。こも世のこともこをうらぬ心ちして
え心づよくもてなし給はずと。なすを
らうくしくわるうなつくして
一りこなるぬ世の法こましさをこ
氣をもれもひこぶれく。歎きなり
おくれし給ひしきなど。今はじめ
こうんよりもめつくしく氣ゆえ。おけ
ゆくをいとこちあしくて出給はん宮
もれし。わさなりけのこぶなるぬ宮
まもしちぶりのこあをいとうらこ
花はこれちるまるそ名ぬかすめ海
こずあ乃わさみどりなる本立ひ
ふぢの葉志給しぶ所のことをけく
しを見し出海にこし月の頃りま

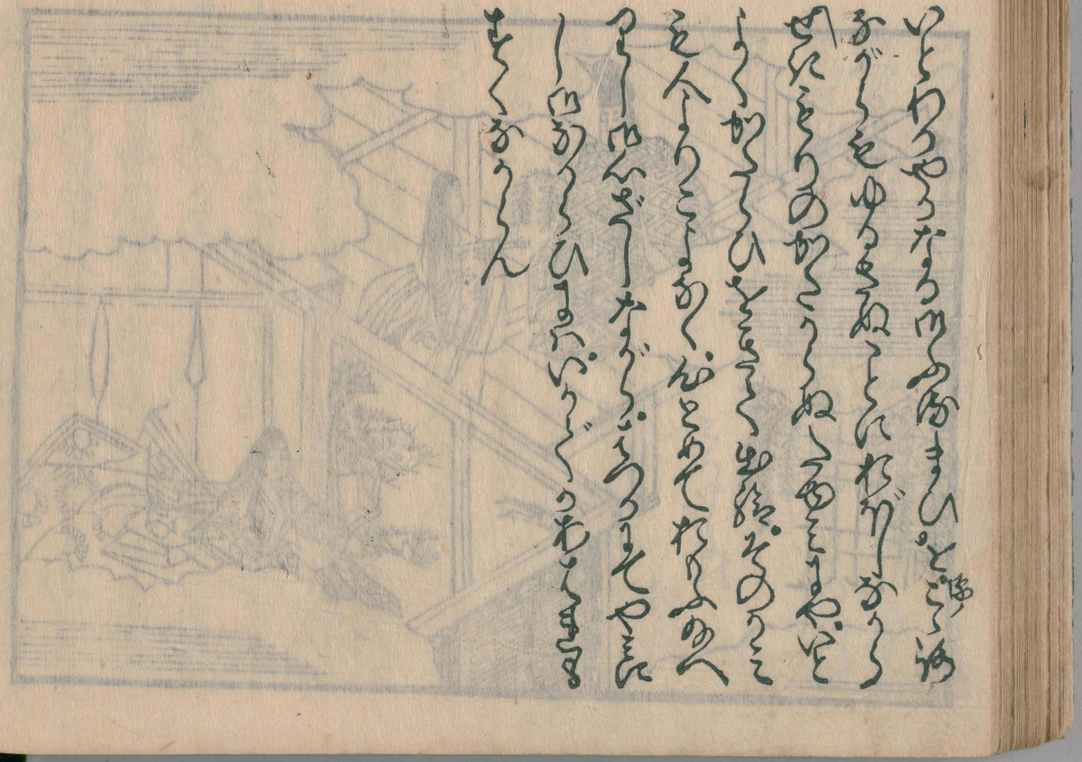
国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用



つましくさ海ぐかさひこゝまを
ゆるまに花のかげはなくなりしそ
勝男をかぶんあちを海ことの間
なしぞうぞしやさうれ
こりすまれ
あと

川野四十八

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

なぐめ給ふ。ひなどすゑ
のつくり(三のくだり)もおもしろく
ちのこゝろくるをさぐべわづらはれ
給ふことわりとこゝろうつくしそおか
しうもあはれとおぼしめぐらすみなりの
(二のくだり)
(院わらはの)
(ゆく)
(うつくしき)
(ゆく)
(ゆく)
(ゆく

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

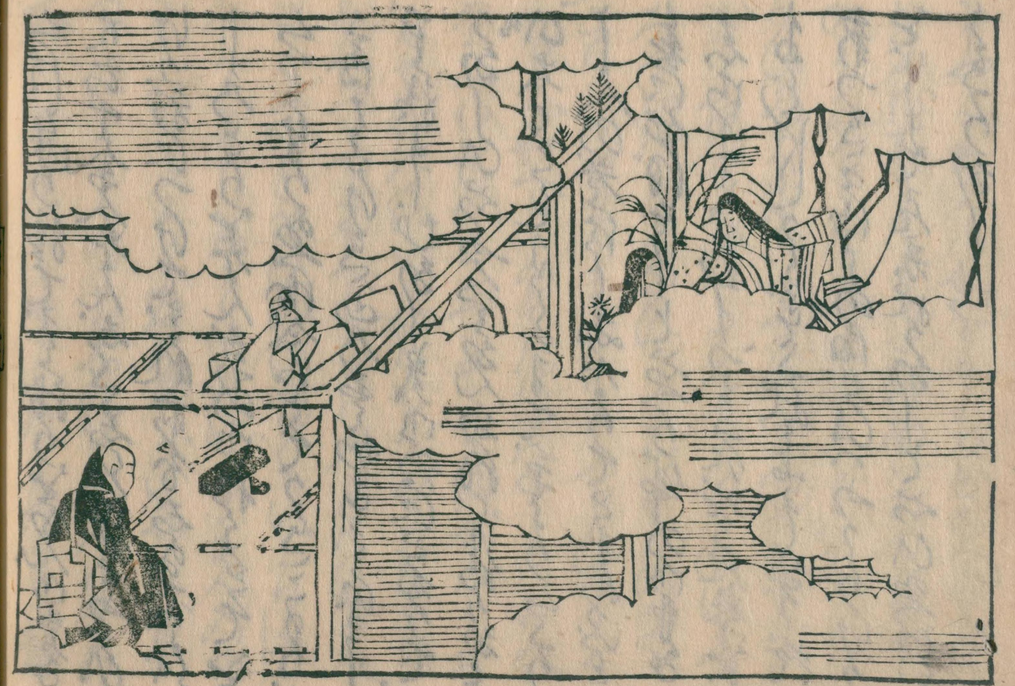
せんさい。渋(うんイ)などめなれざるありしを
小のうべよそへて、をさ物のこぼしを
よろひしてそ、ぶぞうどぐも、まいのと
なり。みかこの日さしに上ざる。たなの
だ臣。或(きんぎ)ノ曰文をもじめなりて、つぎ
くいまして氣語もぬひとなし。
氣基のさうに、家人の知るだろう
ちて、ぶしひんがしよ。こんぶ紀八十ぐ。
ろくのうろひつ四十つぐけて無てゝり。
ひ川じの間だろりに、家人まいるまん
さいらく。わうぶやうなど氣て、日暮
ろ家程に、二海のらんぶやうして、ぐ
そんの氣出てる程、粉つけれぬ氣の
さまなきに、氣もつる程に、柳(タ)中納言
嬉(拍)の書わりて、いりわやをなのうに氣也。紀
萬代院に入ぬる名家、何ず異事と人々送

だ〻うえをいりたまふくうつ給ふ
いうつ〻奏給ふいつ〻者ゝれ〻御給ふ
おどいでゝそ〻まゝそ〻うほのぼの
らひ〻ぬ〻つ〻こにつゆそ〻おこゝかな
ひ〻ぬ〻こゝろもつひ〻おどゝやう〻ゝ少え
給ふ〻ゝいこゝろきあまこゝろあひ〻そ
物の御やうこ〻ろのうち〻ゝ男(を)
ぎ〻ゝえとゝめ給ふつゝとゝ(ひ)をそうのも
よゝとゞれ〻ゝ御わ(ら)ゝこのこゝ給ふ御
給ふうふ〻ゝふ(ら)ふ(ん)のそこゝひとゝろ(に)ふ
ゝ(ら)ふ〻ゝのふ(ん)ひ(と)ゝのこゝろ(を)れ(ば)なむ(と)ひ
いまそ〻ゝ事よゝとのてなれ(ば)のふ(ん)ひ
まゝ〻ゝもむうへ〻ろうてお(ん)のふ(ん)うゝ〻ゝ
と御のうゝ〻そのゝもろ〻ゝおふ(ん)な
人ろうゝ〻ひ(と)お御(ん)ふ(ん)心(こ)ゝろそ〻給ふ
ゝいうあゝ〻ゝこゝ〻ゝのはゝ(ら)ふ(ん)ひ(と)ゝの

ゆ(ん)れ〻ど(も)御(ん)ゝ奏(そ)ゝ(ら)ふ(ん)給(給)ふ(ん)ゝ(ら)れ
ひゆりのうゝ〻ゝ給ふいひまゝ〻ゝみ
わろ〻ゝとおまゝ(ひ)給ふうおりふ(ん)ひ
ゝそ〻ゝうゝ(ん)ゝおゝ(ん)ゝけゝ(ら)ふ(ん)ひ(と)ゝのゝ(ん)
ゝゝ〻ゝあゝしゝするゝゝうゝ〻ゝ〻ゝ
なゝ心ゝろゝうゝ〻わゝゝ〻ゝ人ゝゝすゝ
ゝれゝゝゝゝ〻ゝ人ゝうゝゝをゝゝ〻ゝゝ
ゝゝうゝよ御ゝ給ふゝゝれゝゝ(冬)ゝ
乃ゝ伊勢ゝゝゝゝ(ど)ゝゝゝ(の)根ゝゝ〻ゝ
ゝゝうゝ給ふ(ん)ひ(と)ゝのゝゝゝゝゝ
りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しやうなりけり世をまもらむ人あるべう
なりけれどもまことに對面はあるまじきと
のことわりとて君君はかうことごとしくかれに
かひ乃大臣にとゝはれ此所文云おそ言
ことにはなんはなしてろうこゝにうつ
ろひ給ふしあにがしらもうの所を
くりよ御ときまぐれさまゝひしう
とこゝかしこへしまで僅一人まゐれ二人
なん所々にさかりもを給今はと世
をそむき給しおりをかなしきことぢ
めとおぼしまへしうとぞうけたる
さしぢをあひのひまくにはらはし
なげくかたなくし給しまへ乃所
ことびとこゝろもせずかたしくなん
つて仏にまゐり申し給てなん所堂に
せ終入まゐり給しさしらねもそなき

くはまゐり給てまゐりをなん所事を
れ六十余人なんおとこ君は限さかひ
けり殿につけてこれ所分おのゝ
しのこりとなん家の所れうこそと
くつまゐりの所今はとてうさこゝり
さ所ゝるけきこゝ乃まゐりまゐこゝにまし
まゐ給ましむなし兵所殿にまゐて
なりしひおほふくなんおほく侍りなと
此地大とこゝをまゐらはまて家まりうぐり
し人の考給しおなりてこまれりはと
氣にはばそしとおほり佛の所事を
君所しきこゝしまこゝに誓はれ誓
あどしくうらぎとはこゝやまとなりし給
新つきさ給よの所こひはおりりけり
とまりてこゝ君はなりしとおひおりと
うまりなし



国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

物ゝ、春ゝ夏ゝ夏ゝ夜ゝ、おぼつかなく
てやこなんのこゝそ口れし口れ、よろ
げのことさるへなん（今）の所くあとこそれ
がえ侍れ、さてこゝえこゝり給ふべ、世中
をさゞめなれば、屋ゞてなえ給ふば、
うひなくなんとて、春をまだうわ望
なることゞも侍あり給、明日をれ（係）とゞ
乃志の（修正方）わかしたわ望とみ志給ひて
しを、俄よりひかれたるんを、かなく
志れやうぬべし、身をとついなにだろ
をさひたゞ分望侍るゞ、かくそひかふ
所ゝあなどのいとおし、身ゝなん、おにま
うをくゝ身をを、もそなしにくうべき
とて、曉ゝかつ望わたりなぬ、（宮志付）いい
かゞれたし所をいくくうみなるべき
とくゝをなさぬ、（明石付）今ゝをまりなそん、（明石雄）如所

の君を、いとあれはなん、おがしおく
ゆるさせ給ふ、（係）院もことの給いでに
りし世中れもふやうならば、抱し夫
ク孫ことなきぞ、おまさゝこゝを雅ま
でなゞくへ給ひなんとの給ふりさい
ゝよおぼしをことあるわらんとのなべ
（尾志）又うちおこそ、（付）いでやさまたにそさ
まぐ、あめしなれをくをにそ侍れ
とくゝよろこぶ、（地）このふだこゝ（明石）ゝ世て
まうのがりなぬ、（喜多）ゝよりゝくゝ（明石雄）まりなし
べきさしのこおまさゞ、かくおぼしよる
ことわ望をなりめづらしきことさへそひ
て、いつに心りとなくおぼさるらんを、
此君よりを乃給て、わゝ文志のびてま
いらせなるん此所をづひ志なふ所息（明石雄）
所ハ所いと夜乃こゝ所やすからぬよ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

がちなめる。かろくしく。などかく。後
なり給。こなたにわたりてこそみな
つまなつめと乃給へば。いとうしてこそ
ぐ海なれ。ことなる。女におはしまさん
ごに。わなさなてみなりなんこそ
よく侍しめ。まして男はかぎりなし
とやすくさすまでと。心やまとくおぼえ
なんを。海をふまなてこそやうにへざ
てかましきことなさうしかりきこえ
させ給そときこえ給うちまらひ
て。中ごもにまりをてこそなちきこ
ゆべきなくつまなる。海ごそて今はこれも
こまもさしたなちさうしらなどの
なふこそおされなれ。まづはかやうにも
ひかんまてく。浮きなくいひおこなふ
めりかしこて。中本をひきやりなへ

まば。もや此相にはかりかりて。いとこそ
よげかこと。詩をづくしげなる海さ海し
て。物し給。わつまつるたこえ海ごひかく
さんこえさ海わしなまい。さておはする
をなぞのたこぞふりき心わらんけ
さうべ乃ながうこよこそふんじこ
めころ心ちこそもれとのなへば。わか
うこそや。いまめうしくなりかへ。せ給
めれ。心なまくひまやうしらぬやうなる
心すさひごとごをこそ。時こいでこれと
て。ゆくおこなへまで。物こ衣なりけれ
なしきごともしるなまべ。わやしとう
ちうこふ。心なるさ海なれだ。まづ
りしこそ。のわしの。思ふより悪び
て。侍し。心いろり。此巻数。又まづしき
和などの侍けるを。心こころまを志う

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

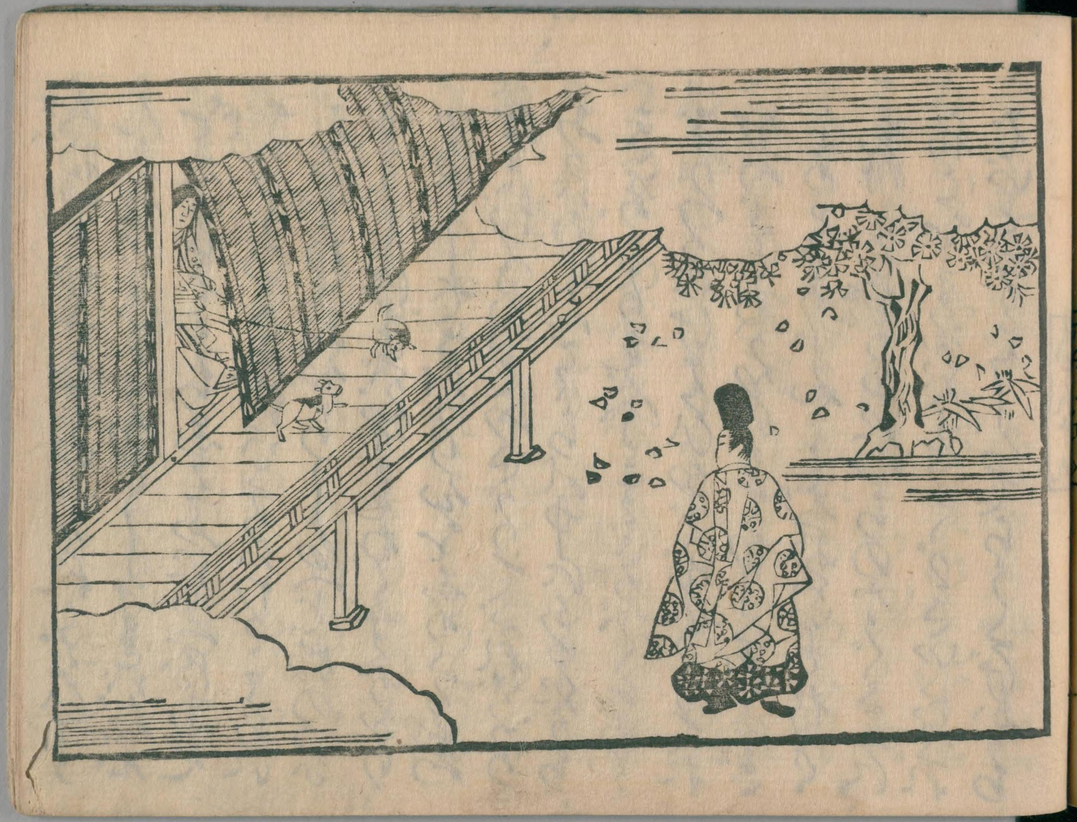
なん思ひあくうまじきことなれば身をもて知
れるべくひがくしきひとにこそはあらぬ
らんにはあけて人のあるべきことを
わりしさてなをし所なく雑色物
し給めまいんやをくんとの給に
はあてをさりやらくこそひがしま
れなど思ひはげけてまふ原業へわろ
給ぬ思ひもいとやんごとなれば思ひしの
こまさるめかれ身ふたて人ようこ
とにかくしをぐしなへ給あるまさまれ
ことをりとみく給へることをめでこれ
女三宮の作りてうわべの作りしづきのこゝめで
こゝてわろうあふともえあのめあら
ざめるれかくてけれまぢなめりし
女三と業ノ
おあしをぢまれおわまれど いまは一さ
たく心ぐるしくとおりうごちゆき給

ま給けてをわがをくをはいとあけ
くぞ見えし給なほ屋んでとあれどにお
ぼしさ海ふもわくさある世にまし
てこちまじ思へきおぼしふしわら
稱ばおどべく今はうゆめ業ふをな
しこうのこえこりまこるやまふ
をおひやはのこそ氣におぼつるなれ
尼君をこそふくち此そのよう稱
をこくこやうなりしひとと此事
あのこそ後の世はおひやまつるか
がめあ給つまを大殿の君は此姫女三宮の
作とは思ひをとまるぬふをわら
ざましうだめにちくれたしまれ
をいとくふをれば見えむと大殿の
作りづきにつをくこ女三宮をまさら
ぬべきわりくよ無りあれをのづ作

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

えもて（猫）描かまさごなどく人々あつまりて
まいりたるに（参）ものよりかけたるを（懸）ぶんとおこせたるに（遣）ふみ
とわくなよひきわげてまいりたるに（曲）
これをこそ（此）かく（書）人々（人）あまりこのおとり
りとわるとうくをしあてつるけ
そのをぢもてつけそひどる
なくまてのこともこうそ
ふみにうちもすさまじてそ
（侍）人わらはべうちもれこのまき
えんうのそくやまこべまいれる
なくあくそみいまてなこうそ
やわらんこころうたするぐあ
まるあこそうけちあるに（侍）
ちしのつまれあうまんて猫

おりあるかそありなるべしいだし
すそまでけざやうにこゆるひとを
よりかけうやうになびきそすそ
のかさやふそぐれうちうつ
げて七八寸ばかりのつらつき
をそぐらよりとおそくさでやあて
すぐうつくしうのうちあてそたゞ
ひとりぐびおそひらくびかりなみ
なまこやうすおくらこちら
もるもあて猫まうにまきて
ふるまひのあちうとれうる
ふるまひをくくてあてそそ
をそこうのかまし猫のいてありへ
こおりのあるあをもちてそ
いとおもしろくそおくうれ人
やとみくる



国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

大将(タイ)いとかなしきものにはれど、たひらん
んをゆくいとうるくしけまぐだん
をえさをてうちしたるにかへ所ぞ
やなどいきの給はさるはわがこちに
をいとわらぬなちしなべど猫のつか
けるしけまぐんりをわらずおかげ
つ所ましてさばかりなをしめくる事(かん)
給はむ所ぬとふさがりてこれだらり
ありはわらんこてらの中にしるにうち
きゆよりを人まぐるべくをわら
ざりつるけはひなどなにかりてお
がぬさらぬかにもてなしこれどまさ(タイ)
よめこぐめじやと大将(タイ)はいとおしく
あぼさるりかになちのなぐさめに
孫こをまゆにませくがきいぐれ
だいとかうだしてらうこげふうち

なくをかつしくおひよそへるぞ
をさぐ志きや(伊)おとぐ所らんじを
こをて上(詞)ぎまのぎいとかつぐしや
こかさふくそとく書のこかみおも
てにいりかまぐこれそかさに急給
ぬ(笛)めをあかとりかて所物語をかふ
つぎくの屋上べはをのこにわらざ
めしてわぎをなく所(持斎)だいもちる
かしかうしやうれものどをさ面ぐ
よをこのふさだにとりませつ。わる
をまろれ人ぐそぼきとりふふるべ
きかうもれだらりして所かりけ
まいる。(柏)清つ給はいといくおひ志め
つまく屋ををまぐはをかのまに
めをけてなぐめやる大将(タイ)は心志り
よおやしかりつるこすれをれかげ
く

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

まなくひて、いつぞ、かつ此ことにふる。なを
うつを人はものしかれん。何ぞ、まほ
けてか、衣とこゝろしかふだかりなが
ぴかしきこゝろ、ことゝ思ひめぐらすに。
いとこゝろなく、此わくりもるるなるべ
き男のなりも、思ひ志るまじ、むけ
のこゝろなりてまうでなぬ。犬ぬ悪び
こつ車まて、道の程物語しかふ。
此此のつまくなは、此院まゝ乗りてま
ぞうらすべきなりなり。なふのやうなん
いと海の気まゝ海ちつけて、花のおり
もぐさびまいれとの語つるを、表おし
こゝがてら、月のうちまこうもこゝて
乗りなへとうくらひちぎる。をのく
わるゝ花の程此物語しかふて、
此とのなをいはまほしかれ。院まゝ

粉この墓に乃こゝ物をさせ語なあ
里なる此此見こゝろとなるなりり
うしこの文いつにおぼしたるん。みどの
のなくびなくなくつしまりなへる
まさしをわくでぐし語まくこんこ
そ心くるしかれとおいなくいへだ。
いぐしきことゝいぐくうさもあらん
こなくなさ海かりておふしくそた
まへなむつびのなだめだろりふそ
あべかめれ。文をばかくぐまつけて。
いとやんごとなく、おもひ、こゝろ
なものをとかくりなへだいであな
う海くまへこれ此まて侍りいとくれ
しげなるありくあなるをや。さるに
世にをしなべてゝぬ人の此おぼしをお
ぐれもぎなりやといとおしがる

いつかまさば花にまづくふ鶯の
梅をかくれ蓑ぐらとはせぬ（約）蓑ぬ鶯
乃ざくらむさつまとまくらぬこころ
よおやしとおぼゆることぞうしと
はすさひまいへいで（夕約）あかわぢさか
の物わつらひやさまばよとこふ
（夕）たゞ山まに蓑ぐらさぐさむるとこ
ぐりもいぐくうさあれ夕にあくべ炎
（約）まりなれとひくさをもむれまのこや
をといふへてかづらつしそれがことに
いまをだぬぬことるまいひまぐら
つしてをのくまられぬ（拍）んの君は
（拍）おほいとのこえんがしの事に独す
こまそぞものし給ける（拍）ふかあり
て年ばかりなすまゐをするに人やり
ならずさうぐしく心ぼそれありく

あまど我男がづりまそおどろ当付
いざらんこのこ心をごろするに此夕夜
よりぐしいくく物をもしくて いつか
らんおりまにまくさばかりあるもなの
かなかゆ（女二ノ）ちさ夜をどこにこんさもかく
をうさまぐれ人なるものの人をそが
つまそあまをこそやまれものいふ
夜ぐるのうつろひをうつくしきに
をのづからさもかくもこのこ隙をう
がひ此ろやうをあまなどこのや
なかくなくふる炎まどの内に何だ
かりのことにつけてうかくふるこ心を
かりとぐにしくをなるべきことむ強い
こくいぶせかれが小侍従がり例の心
なりあて一日（文約）のうぜに此そこれてこう
をのまくをまけいりてまべしにいまで

856
10

まなしがかをなんめぞまはしうと
ゆるしたてこえざりしをこぶとも
わらねやいかよおれかけくしやさ
もやつまかふたしつまがさそ
小行法
今さらにたふかいでそ山稲をま
だねえてこころかけさとかひな
たことはとあつま

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用